
profundity(仮題)

高里いぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

profundity(仮題)

【著者名】

高里いぬ

N9897Y

【あらすじ】
<http://suteinu.at-ninjya.jp/>でも
公開中。

とある雪の日、俺は久々の外出をした。街外れにある我が家と商店の立ち並ぶ通りとを結ぶ道にはくるぶしまでが埋まる程度に雪が積もっていた。

柔らかな雪が俺の肩に落ちた。体温で雪が溶ける。俺は空を仰ぐ。相も変わらず雪は降り続けている。

左手にある傘を差すこともせずに歩を進める。もしも通りすがる人が居たならば怪訝な視線を向けられる事だろう。だが、我が家へと続くこの道を歩く人間なんてものはそう居ない。

孤独。そういう状況下限定の歪んだ自意識過剰に思考を委ねる。雪が降る。その事は俺に外出をする事への意欲をもたらした。俺は現実と空想の境を求めて街を目指す。

時折、現実と妄想の見分け方を忘れてしまつ。

2

今朝なんかは気味の悪い青白い顔をした少年に包丁を向けられ、延々と追い掛け回されるという夢を見た拳銃、目覚めた後に頭を抱えながらこのまま夢が覚める事がないようにと願つたくらいだ。そんな時は外出するに限る。噂話に耳を傾け、酒を煽る。そうすることで自分の知識外の情報を得る事ができる。それこそが現実である証であり、生きる糧となる。

つまりは俺にとっての現実というものはそういうものだ。

整備のされていない道や葉の落ちきつた広葉樹に積もる雪、空を覆う灰色の雲。

それらは知識を持たない俺にとって幽玄の光景だけれど現実だ。今の目の前の光景も現実だろうか。

今、俺の目の前には一人の少女が居る。街の外れ、木々の多いこの土地と街とを繋ぐ一本道を塞ぐようにして雪の中、少なくない荷物を足元に置いて立ち尽くす少女を捉えている視覚は正常なのか。

俺にこの少女は形容し得ない。それだけの高貴さを纏い、綺麗と愛らしさが同居する顔立ちを持っている。ファーの付いた帽子を被っているが、そこから出た長い髪は雪のせいか澄んだ白金の糸のように見えた。

高く売れそうだ。一瞬だけそんな事を考え、後悔した。そんな事を考える大人は関わるべきではないと思わせる清楚さを少女は体現していた。

この少女の存在は空想か、現実か。

まだ街とは相当の距離がある。こんな外れに良家の娘が一人で居るというのは余程の事情があるか、幻視であるかだ。

雪は容赦なく体力を奪っていく。幻覚相手に話しかける労力を割く気にはなれない。構うことなく横を通り過ぎよう。

「私、悪い大人達に追われているんです。私を匿ってくれないでしようか」

少女は背の丈に不釣合いな言葉遣いで俺に話し掛けてきた。言葉の端々から感じる高貴さ、纏う衣服の質、やはり世間で言つ所の良い所の娘なのだろう。

幻視の次は幻聴か。必要以上には人と関わらず、酒に溺れていれば当然か。

全てを幻覚であると決め付ける事は容易だが、それでは何に縋つて生きれば良いのかわからなくなってしまう。ここは自我の知覚する現実を信じる事にしよう。

「俺も悪い大人でね」

深く考えもせずに小さく呟いた。

雪の魅せる幻想の身を案じてもしうがない。

「そんな事はない筈です。私には分かります」

すれ違い様、羽織つていたコートの裾を掴まれた。実体を持った幻覚など、俺は知り得ない。

「少なくとも健全では無いんだがね」

人との接触を極力拒み、妄想に逃避する日々を送る人間の何が健

全か。

「健全じやないとしても、私は貴方を頼ると決めたんです」
悪い人に追われている。匿え。

久々の厄介事、もとい刺激だ。

「お前を匿つて俺にどんな利益がある」

身の回りに何か一つ現実を認識させる物を置くのも悪くないかも
しれない。

「私がお話し相手になつてあげます」

「そうか。俺は帰る。凍え死ぬ前に元の家に帰ると良い」

人付き合いは億劫だ。子供の相手なんてのはその最たる物だ。大人
が経験で理解してきた物の多くを知らない子供が多いのだ。

「帰る家なんていうのは無いです。貴方が私を置いていくというの
であれば、私はここで命を終えることになります。未踏の雪の海に
浮かぶ少女。悲壯ですけど芸術だと思います」

彼女の言葉を聞いた俺は、誰かを馬鹿にする時のような笑みを浮
かべながらこう答えた。

「住み込みの仕事をくれてやる。働く気があるなら付いて来い」

これからは彼女が俺の現実だ。

少女と一緒に我が家へ着いた時には完全に日も暮れていた。

「温かい物を頂けないでしょうか」

冷えたのか少女はソファの上で毛布に包まりながらそんなことを言う。

「そんなものはまだ出せないな。何事も働いてからだ」

まだ荷物すらも片付けていないといつにいくつろぐ訳にはいかない。

幸い、我が家は狭くない。部屋数もそれなりにあるし、庭も自分が食べるための野菜を収穫できる程度には広い。少女のための部屋を用意できることもない。

「そうですか。それにしても良い感じにレトロな家ですね」

少女は軽く散らかった部屋、薄黒くなつた天井や触れれば手に埃が付着しそうな壁を見回しながら言う。この一人で住むには大き過ぎる家は元々、祖父が文化に携わる人間を支援する為に建てたものらしい。

「古い建物だからな。俺を頼つたことを後悔してるか」

年の若い子供というのは古ぼけた物を嫌うものだと。

「いいえ。むしろ張り切つてます」

「張り切る、か。まあ良い、部屋を選ぶぞ。付いて来い」「は、はい」

少女は自分の荷物の重さに難儀しているが、決して手伝わない。甘やかす気は毛頭ないのだ。

雪で反射した月明かりのお陰で室内は明るい。蠟燭も油も持たずに空き部屋の並ぶ一角を目指した。

「ここが俺の寝室だ。隣室の仕事部屋へは中からも移動できるようになっている」

空き部屋までの道すがら、家中を案内する。

「仕事は何をしているんですか？」

少女は当然の疑問を投げかけた。

「俺が仕事部屋に居る間、騒がしくしなければ何の問題もない」

「あの、仕事は何を」

「物を書いている。お前の仕事の事だったら俺の身の回りの世話を
らうに思つていてくれて良い」

舞台の脚本や小説、依頼は色々だ。

「作家さん、ですか」

「とにかく今は部屋だ」

俺はそう言つて話を切り上げ、寝室の前を通り過ぎた。

「この部屋は？」

歩き出していくと、少女は俺の寝室の隣にある一室の扉の前で足を
止めた。

「そこは、たしか」

少女が足を止めた部屋は俺の前の代のこの家の主であつた絵描き
が仕事場にしていた部屋だと記憶している。その絵描きが使つてい
た画材がそのまま残つてゐる筈だ。

「部屋が近ければ身の回りの世話も少しは楽ですし、この部屋が良
いです」

少女は部屋の扉を開いた。塗料の独特的な臭いが鼻腔を襲う。白金
のような髪のかかった肩が僅かに震えた。

「良いのか？」「

もし俺が居候先でこんな部屋を宛がわれたなら主人に文句を言わ
ずにはいられない。

「か、構いません。掃除とかは勝手にしても良いですよね」

「ああ。片付けるついでに古い所とか気に入らない所、画材も好き
にしてくれて構わない」

甘やかす気は無いが、わざわざ苦労をさせるような気も無い。

「よし、頑張る」

少女は袖を捲くり部屋の中の掃除に取り掛かった。既に夜だが騒音に気を遣わなければならないような立地ではない。好きにさせよう。

「暖かい物でも作るか」

俺自身、空きつ腹で寝るのは「めんだ。

次の日の朝、俺が起きると少女は姿を消していた。
昨日に片付け損ねた筈の食器も元の位置に戻っている。少女が包まつた毛布もきちんと折り畳まれている。何かを盗まれた様子もない。

昨日の全ては夢だったか。現実を知覚する為に外出した筈だったけれど、それすらも空想だったか。

少しだけ氣を落としながら朝の習慣をこなしていく。

家の外に出ると、溶けた雪で地面はぬかるんでいた。冷氣で眠気を覚えます為に暫く玄関の前で佇む。次第に頭は冴えていった。昨日の記憶の中の感覚は決して空想のものなどではなく現実のものであった。

では、あの白髪の少女の姿はどうに消えたのか。声を出して探すにしても名を知らない。

背後で玄関の扉が年季の入った音をあげるのが聞こえた。振り向く事をせずに声を掛けられるのを待つたが中々声は掛けられない。

「お、おはようございます。昨晩の内に部屋の整理をしておきました。貴方の使い易いような配置になっていたでしきうから、昨日私がここに来た時から変化した物だけですが」

振り向くと少女が居た、それにしても随分と器用な事をするものだ。

「そうか。飯にしよう」

昨日の事を空想だつたと勘違いしていたことを悟られる訳にもいかないので、俺は素知らぬ顔で家の中に逃げ帰つた。

俺が朝食の用意をしている間、少女はじつと俺の様子を見詰めていた。

「手際、良いですね」

「慣れだ」

実際、一人で生活していればこの程度の事は自然とできるようになるだろう。

「そうですか」

気心の知れない相手との沈黙には気まずいものがある。会話を弾ませるにはまず相手を知ることからだ。

「名前、なんていうんだ」

俺から歩み寄る事に若干の抵抗を感じながらも質問をした。

「ユイです」

姓を伏せたのは誰かに追われているところだと明らかに高貴な身元の事に関係してだろう。

「そうか」

わざわざ姓を聞く必要もない。呼称としての記号が機能すれば問題無いのだ。

「名前、なんていうんですか？」

「教えて欲しいのか？」

「冗談つぽく問い合わせてみる。」

「い、いえ、そういう訳では。ですがやはり不便ですし」

「雑用が仕事なんだ。ご主人様とでも呼ぶか？」

「貴方は馬鹿ですか……」

軽蔑の念の籠った視線を受けた。

「シン」

自分の名前を呴きながら台所の火を落とした。出来上がった朝食をテーブルまで運べば朝食の用意は完了だ。

「目玉焼きって元々はこんなだったんですね……」

殻を割られたばかりの卵を見たユイは何かを小さく呴いたが、俺

の耳で聞き取る事はできなかつた。

「シンは料理をするのが好きですか？」

パンと田玉焼きの載せられた皿を運ぶべく、コイは一枚の皿を持つた。

「嫌いではないな」

「なら楽しみを奪つては悪いので、料理は任せます」

コイは自らの仕事から料理を省いた。

「できないのか？」

「……」

恥だと思つているのか頬を桜色に染めている。

「料理を教えてくれませんか？」

「良いぞ。だがまずは飯だ。早く食わないと寒さで動けなくなるぞ」
こつして約束をしてしまつた。誰かと約束をするなんてことはいつ以来だろつか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9897y/>

profundity(仮題)

2011年11月29日22時48分発行